

飛行機事故と阿部定事件

児玉 寛嗣

我が家から徒歩で十分くらいのところに「はっぴいもーる熊野前」という商店街がある。夕刻にはベビーカーを押した若い主婦や、ショッピングカートを押しながら歩くお年寄りの姿が目につく。客が店主と会話を交わしながら買い物をするなど、下町の風情が感じられる。商店街のほどに石碑と小さな伏見稻荷の祠という奇妙な取り合わせがある。石碑には「杉野中尉殉難遺跡」と刻まれている。傍の区の教育委員会が掲げた説明書きによると、日本航空界の初期の飛行機の墜落現場だとのことだ。

明治四十三年に徳川大尉が代々木練兵場で高度七十メートルで、約三千メートルの距離を飛んだのが日本の初飛行である。それから七年ほど後の大正六年にこの事故は起きた。遭難した杉野中尉は陸軍野外飛行の任務にあり、千葉県の佐倉から埼玉県の所沢に向かって飛んでいた。高度三百メートルでこの辺りにさしかかった時に突然、強風に襲われた。

航空界初期の飛行機事故を綴った報告書によると、強風にあおられたのでとっさに急降下の舵をとったところ、右翼を折られ、破損した翼が機体の後部にあるプロペラに触れて飛散して、複葉翼の支柱も折れ、機体は錐もみ状態となって落下、水田にのめり込み、ガソリンタンクから火がでて原形をとどめていなかったそうだ。当時、この辺りは一面田圃であったので不時着を試みたのかもしれない。

飛行機事故から数年後、ラジウム鉱泉が発見されて地名も尾久村から尾久町となった。湧き出るラジウム鉱泉のお陰で田圃の風景は一転して一大遊興地へと変貌を遂げ、花街として賑わいを見せるようになった。猟奇事件として有名な阿部定事件の舞台となった待合「満佐喜」もこの近くにあった。だが、戦後の高度経済成長期に地下水の汲み上げによって、鉱泉が枯渇していき、花街も衰退の一途を辿った。伏見稻荷の祠は花街だった頃の名残りなのだろうか。

遺された痕跡を手掛かりにして家の近くの町の歴史を紐解いてみるのも一興だ。